

入植と離散と文学サークル運動 ——境界地域としての北海道東部と玉井裕志と山田洋次の出会い

番 匠 健 一
(同志社大学)

私はここ5年ほど年2度のペースで北海道東部の調査を行っております。スライドに映っている写真は、北海道東部にある野付半島です。この半島は三日月型になっていて、オホーツク海側を見ると「北方領土」と呼ばれているロシアが実効支配するクナシル島(国後島)が見えます。反対側には、北海道別海町・標津町の陸地が見えるのですが、半島が三日月型になってるので強い浜風の吹く草原に立っていると時々どっちの陸地が日本かロシアかわからなくなります。私がこの写真を撮った2019年8月13日は、野付半島の中ほどにある会津藩の北辺警備藩士の墓で供養祭が行われたようで、白地に葵の紋や「會」の字がえがかれた陣幕や旗が風にたなびいていました。幕末1859年に江戸幕府は東北六藩に蝦夷地の警備を命令し、会津藩は北方交易の拠点であった標津を担当します。野付半島には1863年に死亡した会津藩士三名が葬られました。戊辰戦争で敗れたのちに1868年に渡米し、カリフォルニア州にアメリカ合衆国最初の日本人入植地「若松コロニー」をつくったのも会津藩であったことを考えれば、幕末から明治にかけて生きた人々の境界認識や移動経路はとても興味深い。私が道東を歩きまわるのも、戦後日本社会で見失いがちな境界や移動の感覚に触れるためかもしれません。

二つ、自分のかかわっている研究領域の話をして。一つは、境界研究(ボーダースタディーズ)で、北海道大学を中心に研究蓄積が進んでいます。空間というものをあらかじめ設定されたものとせず、常に境界が再設定されて境界線が移動する、複数の境界線が交錯するという認識の下で、そういった境界に直面しながら生きていく人々の生活史をどう描くのかということが問題になっています。もう一つは、移動研究あるいは移民研究の領域で、私は北海道を研究していて非常に困ることがあります。自分としては植民地研究のつもりで北海道を研究しているのですが、植民地研究では北海道は国内だから植民地じゃないよと肩身が狭くなる。移民研究に行くと海外移民が中心ですので、北海道開拓は国内移動となってこちらでも肩身が狭い。本シンポジウムでは、移動研究を

このあとどう拡張していくかが求められていて、私のフィールドである北海道はとても重要な場所だということをお願いしたいと思います。

1. 境界領域としての根釧原野

(1) 根釧原野と移動の交差

北海道という空間を思い浮かべたときに、最初に思いつく言葉は開拓ですよ。明治初年度に国有地化宣言をされて、内地からの移住者によって札幌の街ができてゆく。植民地都市といってもいい場所だと思います。そのあと1930年代には北海道は、「移民」の送り出し地になっていて樺太やブラジル、南洋群島などに非常にたくさんの人を送っています。戦後には、引き揚げや復員人口の吸収地としてももう一度大量の移住者が入っては出ていく。また炭鉱の閉山が進む1960年代以降は、九州から炭鉱離職者たちがブラジルに渡りますが、北海道の炭鉱に渡ってくる人もいます。そういった移動の総体から見たときに、北海道という場所をどう捉え返せるのかということ自分の研究でやっていきたいなと思っています。

今日のお話は、北海道東部いわゆる道東についてです。昨年ピーチ航空で関西空港から釧路への直行便が開通して、アクセスが若干よくなりました。ただ私は新千歳から毎回違うルートを通して道東に行くようにしていて、寄り道ばかりしています。スライド3を見ていただくと、左が世界銀行の開発計画の地図ですので、日本国政府が言うところの「北方領土」は入っていません。気候的には、1月までは積雪は少ないですが気温がマイナス10℃~20℃で風も強く、ゴールデンウィークぐらいまで地下凍結があって、畑作が難しい場所になっています。夏は、道東文学によく描かれている海霧(ガス)が出まして、日照時間が限られている場所です。大正期には関東大震災の避難民をかなり受け入れているのですが、1929年から1932年まで、大冷害と虫害が連続して、根釧原野を放棄して満州や樺太、あるいは南洋やブラジルに渡ろうという動きができました(安田1941)。近代北海道は「開

拓」という言葉で語られることが多いのですが、北海道から出ていく「出移民」も多い。道東だけでも、歴史的にいろんな形の移動が交差していて、実体からみるとカテゴリーをつくって区分することは難しいと思います。こうした移動をあらわす言葉のなかで「植民」がかなり重要だと思ってまして、「移民」は、国境という境界線を前提にするのに対して、「植民」は、例えば武装移民なんかもそうですけど、国境線に限らず軍事的な境界線を再設定したり、固定化したり強化したり、あるいは境界線を移動させたりすることに関わっています。

(2) 戦後の根釧原野と実質的「国境」地域

1930年代から移民の送り出し地となった北海道ですが、それは朝鮮半島や満州などの植民地に比べ相対的に開発の重要性が減少したことも関わっています。しかし日本帝国の崩壊とともに植民地を喪失した国家によって戦後の北海道は植民地が担っていた役割を肩代わりする地域として再び見出されます。戦後の緊急開拓事業のなかで食糧増産と引揚げ・復員人口の吸収地として脚光を浴び、道東の別海町でも外地引揚げ者や戦災者の入植にともない軍用地であった計根別飛行場や広大な軍馬補充部根室支部の土地が解放されます。別海町や標津町は天気の良い日には国後島を目視することもできる距離にあり、ソ連との実質的な国境線が海上に走っています。戦後から1950年代にかけて漁船がソ連の軍艦に拿捕される事件が続いたそうです。またB-29が撃墜されて民家に落ち、大火事になるなど軍事的な境界線を意識させる事件には事欠きません。別海町の役場の正面には電光掲示板に「四島返還あなたの声こそ力です」というスローガンが表示されています。別海町の沿岸部にある道の駅おだいとうには、総理府と北海道が進めた「北方領土を目で見る運動」を受けて1982年に別海北方展望台が建設されており、北方領土に関する資料展示室やモニュメントがあります。

(3) 根釧パイロットファームの光と影

このあと紹介する文学サークルにも関わりますが、別海町では世界銀行の融資を受けた農業開発プロジェクトが始まります。黒部ダムや愛知用水、東名高速道路などは有名ですが、世銀融資の31プロジェクトのうち農業案件は北海道の根釧パイロットファームと篠津泥炭地開発、青森県の上北パイロットファームの三つです。篠津は泥炭地の水田化で、根釧と上北は酪農の導入が目的です。根釧の場合は、地元からの働きかけは全くないとい

ろに計画がつくられましたが、背景には朝鮮戦争の終結にともない軍事需要が低下するなかでアジアに販路を開拓しようとするアメリカの農業機械メーカーの動きがあったようです。これらの事業は最終的に戦車の製造で有名なキャタピラー社が受注しました。

根釧パイロットファームの特徴としては、ブルドーザーやレキドーザーなど大型農業機械による機械開墾で、あらかじめ入植地が造成され住宅や牛舎が準備されているので、これまでの北海道開拓のように入植した後に森を開き伐根して開墾という重労働は必要ないと宣伝されていました。乳脂肪分の高いジャージー牛が指定品種となり、こうした手厚い待遇の代わりに入植者は当時250万円ほどの額を入植後に償還していくこととなります。こうした大型農業機械による方法は、その後の北海道の開発モデルとなり、途上国援助のモデルともなっていると評価されています。1956年から入植がはじまりますが、割り当てられた土地にばらつきがあり、オーストラリアから輸入されたジャージー牛の品質も悪く、のちにブルセラ病の流行もあって離農や夜逃げをせざるを得ない世帯がでてきます。近年では初期の営農設計の不備やずさんさも指摘されています。現在は、北海道でも有数の酪農地帯として知られていますが、離散した入植者たちの経験は地域の歴史からもなかなか見えてきません。

(4) 別海村の自衛隊誘致と矢臼別軍事演習場

スライドの『根釧原野開発計画調査資料』で黒く塗りつぶされた右の二か所がパイロットファームの入植地で床丹第一（現在の美原）と床丹第二（現在の豊原）になります。左の黒塗りの箇所は、現在の陸上自衛隊矢臼別軍事演習場の敷地になりますが、1957年当時はこの地域に別海町・中標津町など酪農地帯と釧路などの港を結ぶ道路交通のハブ機能を持たせ、パイロットファーム方式による矢臼別地域の開発が計画されていました。しかし戦後開拓の入植者たちからの自衛隊誘致の請願に加え、1960年以降は防衛庁からの強い働きかけもあり、1961の別海村議会で自衛隊基地の誘致と矢臼別の軍事演習場が決定します。当時、矢臼別地域には自衛隊演習場案の他に、農林省の植林事業を進める案や、酪農家有志から請願もあったパイロット方式による酪農開発の案があり、地域社会の未来をどのように設計するのか議会でも揺れていました。根釧パイロットファーム事業の初期営農設計の不備に加えて、乳価も安定せず、別海村議会の議事録を読む限りではパイロットファームからは税金がない年が続いた財政的な要因がありました。矢臼別軍事

演習場は、冷戦下でソ連を仮想的とした北方機動演習の舞台となります。現在は、SACO 合意による沖縄米軍の本土移転訓練5ヵ所のうちのひとつとなり、アメリカ海兵隊による実弾射撃訓練の舞台となっています。

2. 酪農家・玉井裕志と朝霧文学会

(1) 玉井裕志と朝霧文学会

私は、引揚げや戦後開拓での入植を経験した人たちが、その後どのように戦後を生きたのかとても興味を持っています。そんなときに出会ったのが元酪農家・作家の玉井裕志です。略歴にもありますが、玉井の両親は大正期に四国から釧路にきた後、空襲を避けルランや弟子屈で炭焼きをしながら生活していました。1958年に根釧パイロットファーム床丹第二地区に入植し、過酷な農作業のかたわらで文学サークル活動を始めます。経営が非常に苦しい時期があり開拓農協から離農勧告を受けたこともあったそうですが、1989年まで酪農を続けながら豊原(床丹第二)で起こったことを作品として発表していきます。2018年3月9日、「朝霧文学会」52年目の集いが開催されました。会場には創設メンバーの畠沢憲二と玉井裕志、同人の吉野宮子、阪口美貴子が集まり、朝霧文学会の成り立ちや活動について聞くことができました。2016年から継続的に行っている聞き取り調査とともに、朝霧文学会の活動と玉井裕志の作品を紹介したいと思います。

1966年1月3日、年明けに暴風雪のなか別海町中春別市街の岩間旅館に、別海酪農高校2年の畠沢憲二(当時16歳)、NHKラジオで活躍中の詩人小野京子(当時19歳)、そして根釧パイロットファーム入植8年目の酪農家・玉井裕志(当時31歳)が顔合わせを行い、朝霧文学会が結成されました。当時の畠沢は、学習雑誌旺文社のコンクールに原稿用紙20枚の創作作品を応募し入選、当時1万円の賞金を使いやすり版、鉄筆などの道具を買い揃えたそうです。畠沢は1号から5号までの鉄筆を担当しましたが、ガリ切りの技術は、別海酪農高校の教諭で朝霧文学会同人である吉野宮子氏のお連れ合いから見様見真似で学んだものだそうです。畠沢氏は、当時電灯のないランプ暮らしをされていたそうですが、その後株式会社ほっけんを起業し実業家として成功を収められています。

(2) 『朝霧』と玉井裕志の作品①「その眼は……生きていた」

朝霧文学会のサークル誌『朝霧』は、2018年現在で発行52周年ですが刊行されたのは26号であり、その半分が休刊期間になります。創刊号の巻末には、会員資格が記載されており「根室管内に在住し、農業関係の職業に従事する中学校卒業以上のもの」となっています。『朝霧』の執筆者のほとんどが農業(酪農)関係者で、玉井の短編小説の他、俳句・短歌・詩・エッセイ・生活の記録などが掲載されています。スライドには1966年の創刊号から1970年までの『朝霧』に掲載された玉井裕志の作品のタイトルがありますが、この時期の作品の特徴としては玉井が入植した根釧パイロットファーム床丹第二地区を舞台に、入植者たちの労働や離農の風景などが濃い密度で描かれています。こうした玉井の作風には、早稲田大学露文科でショーロホフの『静かなドン』の翻訳を行ったのち、北海道へと渡って獣医になった芝田重郎太の影響があります。芝田は、早稲田時代に共産党に入党し、1963年に別海村農業共済組合の獣医師に就職したのち独立開業し、別海村議会議員を務めるかたわら、乳価闘争や矢白別軍事演習場反対闘争にも関わります。

玉井裕志「その眼は……生きていた」(『朝霧』創刊号、1966年)の冒頭は、一直線の地平線に沈む夕日が大自然を紅一色に染める美しい光景をバックに、妻と娘そして犬の家族写真を撮る男の眼光からはじまります。この作品は、孤独を抱えながらも酪農家として成功する西沢省三と妻の京子、そして京子とかつての婚約者であり配合飼料配達をおこなう吉岡常雄という、京子を軸にした二つの人間関係で話が進みます。興味深いのは、京子と吉岡がともに南洋群島コロール島の引揚げ者であり内地に故郷を持たず、また西沢省三も帰ることができる親兄弟を持たない孤独を背負うという、不安定さを生きる存在として描かれていることです。舞台は開拓十周年の開拓記念祭がせまる美しい夕刻の根釧パイロットファームで、何かに追われるようにしながら懸命に働く省三は、開拓記念祭で最優秀賞を授与される報せをうけたものの、受賞を素直に喜ぶことはできません。省三の言を借りるならば、「喜んでくれる親があり、兄弟があつて」こそ表彰されることが喜びに繋がるのです。

「ともすれば、つらかった少年時代を思い出すのか、省三の日常生活には、何としても拭い得ない、孤独の暗い影がひそんでいた。昭和31年に、最も新しい方式の機械力による開拓が、この地にはじまって、最

終年度までに、三百数十戸の人々が全国各地から入植して来た。十年目の今年までに開拓者という、きびしい試練に対抗する事が出来ず、六十戸にあまる人々が離農していった。その中には、自分の資産を整理した自己資金を、百万円近くも持参して入植した人もかなりあったと聞く。それなのに省三は、炭鉱で働いていた時の三十万円足らずの貯金を元手に、この開拓地にいどんだのである。そして入植九年目には、粗収二百三十万をこえる酪農家に成長していたのだった。」「その眼は……生きていた」、28頁

妻子だけでは代替できない西沢の親兄弟という「欠如」は、彼を「花」と「写真」という異なる方向性へのこだわりへと導きます。住宅の南側の二つに区切られた花壇には、片側に根室原野に群れて咲く、月見草、黒百合、リンドウ、アザミ、茅、山百合、アヤメ、甘草など野生の花が移植され、もう片側の耐寒ブロック住宅のお茶の間の窓際には、ベゴニア、フクシヤ、ゼラニウム、プリムラ、コルダグダ、ハナキリン、ペニチヤ、姫ダイダイ、シクラメン、サイネリヤ、アロエ、ボケなどが鉢植えにされている。庭を家族のアナロジーとしてとるならば、「野生の花には、かざらない美しさがある」という省三の言葉からは、自己を投影する原野から「移植」された草花が家に「根付く」ことを意味すると同時に、あらゆる園芸植物を取り寄せて絶えず花を咲かせるこだわりには、完璧な家族を構成したい欠如を読みとることが可能です。

次に吉岡と京子の関係ですが、南洋群島をめぐる研究においては、パラオ（瑞穂村・朝日村・清水村）やポナペ（春來村）など南洋庁の撰定移民が行われた地域において、北海道出身者の移民が飛びぬけて多かったことが指摘されています。これに対してサイパンやテニアンなど北マリアナ諸島は沖縄県出身者が多数を占めていました。パラオの朝日村の名前が、出身者の多かった北海道旭川に由来することも知られています。

「太平洋戦争以前、志を抱いて部落の人々の反対もききいれず、進んで海外移住の申請をし、西太平洋にあるパウル諸島のコロール島に、この地から互いに励まし合って旅立っていった程の間柄であった。そして、その島で終戦をむかえて、体一つで祖国日本へ帰らなければならないはめとなった。吉岡家と京子一家は、その引き揚げも一緒だった。しかも運転手の吉岡常雄は京子より二つ歳上で京子と同じ生れ

故郷をパウル諸島のコロール島にもった幼なじみでもあったのである。」「その眼は……生きていた」、29頁

吉岡と京子は仲のいい親同士の相談によって「結婚する運命」にあり、また二人は南洋での「外地経験」も同じくしています。ある日、京子は吉岡からの手紙によって町はずれの黒百合橋で待ち合せ映画に行くこととなりますが、水色のパーバリーコートを着て京子を待つ吉岡は、北海道の開拓地では浮いたモダンな存在として描かれています。農村に愛着を持たず農作業を嫌がる吉岡に対して、京子は農村に定着する生き方を目指し西沢と結婚します。顔を合わせても一切言葉を交わさない関係性の背後で、外地経験の沈黙化という事態が描き出されています。

(3)『朝霧』と玉井裕志の作品②「D階層の人々」

玉井裕志「D階層の人々」(『朝霧』第3号、1967年)も1960年代の根釧パイロットファームを描く重要な作品です。この作品は、十勝から根釧原野に入植した信介と洋介の兄弟、そして農協監事の早瀬健一郎という3人の同郷出身者達と、同じく入植者である素川満彦の4人の物語です。物語の前半は、兄・信介と早瀬の農協での会話からはじまります。道庁の開拓経営課から指示のもとで、早瀬は、転落した開拓者を「整理」する方針であることを信介に伝えます。入植者たちは4つの層¹⁾(A層は農協に預金があるもの、B層は収入・支出がゼロ程度のもの、C層は30万円程度の負債があるもの、D層は生産源である乳牛頭数が極めて少なく40万円以上100万円に近い負債があるもの)へと分けられ、早瀬は兄・信介に弟・洋介がD階層へと落とされたことを告げます。早瀬、信介、洋介の3人は十勝の同村出身であり入植に際しても強い絆を持っていました。しかし互いの入植地の距離が10キロ以上離れていたこともあり、早瀬に知らされるまで兄・信介は弟の窮状を知ることはありませんでした。早瀬のもつ農協の帳簿には、開拓者全員の乳牛頭数と負債の額が個人別に整理されており、氏名の一段上にはA・B・C・Dの階層の文字が記入され、弟・洋介を含む数人のD階層の人々は赤インクでチェックされています。

「D階層処分。それは、高額負債者に対する過酷な判決のようなものであった。何の手段もない、ただ鋏を握ることにのみ、生き甲斐を感じ、この広い草地

あってこそ、たくさんの牛たちと共に自分たちも生かされていくのだという、明日への可能性だけを信じて生きて来た人々への解雇命令なのであった。」
「D階層の人々」、31頁

1週間ほど前に営農指導所長からD階層処分を聞かされた弟・洋介は、自身の財産が少しでも残っているあいだに入植地からの脱出を考えます。つい先月、夜逃げをした入植者と同じように、他人に気取られまいと「物干竿に洗たく物を干したまま」、そして「室内の電球はつけあかしのまま」にしておいて、入植者たちが出払う開拓記念祭の宵まつりのその日に決行しようと考えます。すべての家財道具と牛をつみ込んだトラックがまさに出発しようとしたその瞬間、早瀬と兄・信介が弟の家にかけて、兄弟は20数年ぶりの取っ組み合いのケンカをします。兄より体格が二回りも大きい弟・洋介は、太平洋戦争が激しくなった昭和19年頃の疎開した農村では毎回兄に勝っていました。しかし、開拓村における農業経営の勝敗は残酷です。このケンカを通じて、弟・洋介は開拓地での自身の敗北を認め、3人の絆のもとで経営再建が始まります。

対して作品の後半には、再建不可能なD階層農家・素川満彦への離農宣告と家財が競売にかけられる様子がなまなましく描かれています。開拓農協で離農を宣告された素川が家に帰ると、家族の目の前で農協職員の手によって競売が始まり、これまでの労働と生活の結晶である生活資材がパイロットファームの入植者たちに二束三文で買いたたかれていく様を見せつけられます。この作品では、無言の絶望のなかで、入植者たちが離散した後の痕跡を「蟬の抜け殻のような廃墟」と表現しています。「蟬の抜け殻」は、ともすれば蟬の短い生命が終わった後も残り、季節が過ぎ去ったあとにもその生命の痕跡を残し伝えるものでもあります。玉井が根釧パイロットファームを故郷喪失者の側から書き続けます。彼はこの廃墟の傍らで統計資料や地域の歴史から消失していく離散者たちの生命の痕跡へこだわるからです。

(4) 酪農家・玉井裕志と映画監督・山田洋次の出会い

別海町の根釧パイロットファームの入植地にこだわっていた玉井作品を大きく広げることになる一つの出会いが1969年冬にありました。映画『男はつらいよ』の第一作が大ヒットとなった山田洋次監督が、酪農村を舞台にした映画『家族』の取材のために中標津町・別海町を訪れました。役場から紹介されて来たという山田との初対

面の印象を、玉井は中標津のローカルラジオ FM はなの放送で答えています。

「本当に若い人で映画監督だっというもんから、最初はムカッと来た。我々の苦労もなんも知らんくせに、華やかな、酪農郷っていうのが豊かで、家族が和気あいあい生活してるんだって、そういうイメージを映画で撮りに来たんだと。凄く腹が立ったのさ。そんなもんじゃない、と。そして私は、いまの酪農家は行きずまってるんですよ、大変なんだって、そんな僕は喧嘩を吹っ掛けた分けじゃないんですけど。そう言って一応抑えた。そしたら、それが山田さんのハートをうったんだね。毎年苦しくて離農したいと思ってるんだけど、次の春になったら大草原が緑が次々に萌えあがって、それを牛が食べて乳房が膨れ上がって、牛乳がどんどん出だす、と。そういうのになってくると今年もそんな気持ち起こさないで、もう一年頑張ってみようというそういう気になるんだって、それを山田洋次さんに言ったんですよ。それがセリフになったの。『家族』でも倍賞千恵子さんがそれを言うし、『はるかなる山の呼び声』でも倍賞さんが高倉健さんに言うんですね、「私は体小さいし大風が来ると体が吹っ飛ばされそうになるんだけど、また春になったら希望が湧いてきて言うんですよ」って、それは私の妻が言ったセリフなのさ、山田さんに。」
「がくさんの座って立ち話」2016年9月17日放送、FM はな（中標津）

入植地で離農する人々をずっと見ている玉井は、現在の道東観光にも重なる山田の酪農のユートピアというイメージは現実ではないと突きつけます。山田の映画作品で北海道が舞台となることは他県に比べて多く映画『男はつらいよ』の映画シリーズでも最多となっていますが、山田作品における酪農の描き方の変化についても道東の人々との出会いをぬきに語ることはできないように思います。

(5) ルーツを根こそぎにする農業機械——「排根線」

離農を扱ったテーマの集大成ともいえるのが、玉井裕志「排根線」（『海燕』1982年）という作品です。「排根線」とは、森林が切り開かれたあとに入植地に残る切り株をブルドーザーで引き起こして、入植区画の端によせてきた巨大な壁のようなものです。年月がたつと、木が生えていたりしますが、現在残っている場所はほとんど

どありません。

「排根線」のあらすじを簡単に紹介いたします。海霧（ガス）が立ち込める根室原野のパイロットファームでは猫背の卓造が黙々と労働を続けています。彼がやっているのは何年もかかって鍬などの農具で排根線崩しをすることでした。旭川の田んぼを処分して移住してきた卓造には五人の息子たちがいましたが、長男と次男がガダルカナル島で、三男が沖縄戦でそれぞれ戦死しており、四男の義春夫婦が旭川の田畑を売って卓造とともに根室原野に入植するという設定になっています。卓造はこの四男の頼みで、一戸当たり3.5～4ha程度が割り当てられた薪炭備林地の木を残し、排根線くずしで出た木材を乾かして焚き付けにして、かつ耕地面積も増やすという仕事を何年も行っているのです。

「根室原野へ入植した年の春から卓造は六、七年もの長い間、そんな怪物のような機械がしてかした排根線のあと始末をコツコツとつづけてきたことになる。鍬や、スコップを使って土を切り崩し、その土の下から掘り出した立木や、二抱えも三抱えもありそうな大木の切り株などを鋸や斧や金矢などを使って切りぎんだ。……（中略）。一鍬一鍬、切り崩す排根線の肥沃な土を卓造はじんわりと握ってみる。何十年も土に生きてきた、それは執念のようなものであった。それが、肥沃な土か、やせた土壌かは、見た眼とこうして握ってみるによって卓造にはよくわかる。——何て、ブルドーザーというやつは、ひっこ抜いた木の根と一緒に肥えた表土をかきむしって、みんな排根線へよせちまったもんだ——卓造は、むらむらと腹がたってきた。」（「排根線」、278-9頁）

この小説では、機械開墾によって農業の進歩と未来の象徴のように思われてきた根釧パイロットファームが抱え込む矛盾を、ひとりの農民の土の感触から問うという構図になっています。「巨大な怪物」のようなD8型ブルドーザーによって造成された牧草地には地力が貧しく、牧草地に不要なものとして端に寄せられた排根線にこそ「肥えた表土」があるという対比は、夢のようなプロジェクトに違和感を持つ卓三自身の位置取りとも重なります。

「排根線」の後半では、根釧原野を覆う深い海霧のなかでバスを待つ人たちのお喋りのシーンがあります。

「ところで、今日の（農協の）総会は大荒れだね。D階層、E階層の離農問題で。気の毒に、もうそれらの人たちには、離農する以外道はないみたいだね。それらの人たちには新しい資金の貸し付けはされないらしい」（中略）「何てったって、ブルセラ病でよ、牛を全頭屠殺処分されたために、DE層に突きおとされた人が一番気の毒だ。ジャージー牛だなんてあんな尻のつっぱりにもならん鹿みたいな赤牛を、世界銀行からかねをかりてまで波路も遠いオーストラリヤくんだりから輸入したもんだから、とんでもねえ伝染病まで一緒に輸入しちまってよ、ホルスタインにまで感染させやがったんだからな」玉井裕志「排根線」、280-281頁

あまりに海霧が深すぎて「どこの誰かも」わからないお喋りを聞きながら、卓造は自身の家が離農の危機にあることを知ります。海霧は、『挽歌』の原田康子など北海文学の同人たちによって物語を駆動させる装置として多用されてきました。「排根線」では、海霧で人の姿形が見えなくなることによって、普段は見えないパイロットファームの真実が見えてくるという道具として使われています。ダイナマイトで爆破される排根線を横目に、独りで部落を去る卓三の姿には、排根線と同じくルーツを根こそぎにされた人々の姿が重なります。

(6) 離農と「原野」へのこだわり——玉井裕志文学館

「根室原野での入植の現実、まことにきびしく、私の少年時代の農村というオアシスのようなバラ色の夢は、たちどころに、次々と打ち砕かれていった。多忙と、貧しさと、過労とが、束になっておそいかかってくる現実に、私は、立ちむかって生きなければならなかった。でも、私は、ここであっさり少年時代からの夢を放棄してしまったわけではなかった。多忙をきわめる日常生活のわずかな時間を縫うように、わずかずつでも、読書は続けていった。そして、朝、暗いうちに起き出して、文章も書くようになり、とよ子が生まれた翌年の春には、広く呼びかけて、それに応じてくれた仲間たちとともに「朝霧文学会」というサークルを結成し、文芸雑誌『朝霧』を創刊していた。」玉井裕志『萌える大草原』草の根出版社、1987年、65-66頁

玉井は1989年には最終的に離農して中春別の街へと移

り住んでしましますが、牛と牧草地は全部売り払ってしまったあと、入植時の住宅と牛舎だけは残っています。広い土地で晴耕雨読の生活を送るという幼い頃からの夢はついていたかに見えますが、玉井は2013年に玉井裕志文学館として住宅を解放します。憧れてやまない原野との関係を保ち続けると同時に、根こそぎにされても立ち退かないという抵抗の身振りとも考えることができます。

3. 山田洋次と北海道 ——民子三部作と『母と暮らせば』

1) 山田洋次と民子三部作

山田洋次が撮った映画のなかで、北海道でロケをしたものが多いということは先ほど指摘しました。この中で特に注目したいのが民子三部作と呼ばれる作品群のうちの『家族』(1970年)と『遙かなる山の呼び声』(1980年)です。『家族』は、井川比佐志と倍賞千恵子が演じる長崎県伊王島の炭鉱夫一家が炭鉱の合理化にともない、八幡製鉄所や大阪万博、東京を経由して北海道中標津の開拓村へ入植するまでの日本列島縦断を描いたロードムービーです。移動にともなう家族の死を経験しつつも、中標津に到着した一家は酪農をはじめ緑の草原で牛と人間の生命再生産が始まるユートピア的な結末になります。これに対して『遙かなる山の呼び声』では、倍賞千恵子演じる連れ合いに先立たれた零細酪農家の母子が、高倉健が演じる流れ者との共同生活のなかで農業経営の立て直しを図りますが、最終的に離農するというストーリーです。設定では『家族』の入植先は中標津ですが、ラストシーンの中標津の開陽台牧場をのぞき、牛舎や入植先の住居のシーンは別海町の豊原(根釧パイロットファーム床丹第二地区)になります。先ほど紹介した玉井さんは、『遙かなる山の呼び声』でエキストラとして出演もされています。またシリーズ38作目の『男はつらいよ 知床慕情』では、三船敏郎演じる獣医が電話で「玉井さん」の牛をめぐるやり取りのシーンがあります。酪農の描き方の変化には、映画のロケハンを通じて道東で出会った人々との関係性が現れているように思います。渥美清さんは、現在も深刻な酪農家の結婚問題にかかわり別海町と大阪でお見合いパーティーを盛り上げる役をされていました。また民子を演じた倍賞千恵子さんは、小六禮次郎さんと共に別海町の別荘で過ごされるときには、地元の青年たちとかかわりを持っていたそうです。

(2) 引揚げ者としての経験の言語化

山田洋次は、引揚げ者として植民地経験を積極的に発言をしていることでも知られています。

2006年11月27日に開催されたシンポジウム「引揚六〇周年記念の集い～いま後世に語り継ぐこと～」(九段会館大ホール)においても、なかにし礼(作詞家・作家)や高野悦子(岩波ホール支配人)などと共に登壇しています。

「私の妻は山陰生まれである。私自身は満州半分、日本半分という無国籍風な育ち方をしている故郷というものを持たないためか、故郷のある人に対しては幼いころから強い羨望、ないし、あこがれをいただくのが常であった。」[「地方訛り」『新潟日報』1972年4月4日、(山田洋次『映画館がはねて』中公文庫、1989年、101頁)

故郷がない、あるいは育った場所と切り離された故郷喪失者であるという感覚は、北海道に入植した人々、あるいは入植した後に離散せざるを得なかった人々とも響きあう感覚なのかもしれません。同時に山田洋次の引揚げをめぐる経験の言語化には、引揚げのナラティブに見られる犠牲者ナショナリズムと植民地の忘却に対する警戒意識が働いています。

「要するに生活に苦勞がなく、植民地独特の封建的な人間関係から解放された生活環境の中で育った私に、貧しいということがどんなにつらいことか、生きるということが、どんなに切実なことか、ということはおよそ理解できなかったのである。／昭和20年、日本が戦争に敗れると、満州の日本人の生活は一転して悲惨なものとなった。私たち一家も、命からがらリュックサックをひとつずつ背負って米軍払い下げのリバティ船に乗り、内地に引揚げた。……(中略)。みじめな思いをすることがよいことだ、とは思わない。…しかし、私にとっては、日本の敗戦によって引揚者となり、山口県の田舎町で生きるために味わった体験が、とても貴重なものだと考えている。」[「飛ぶ教室」1982年(山田洋次『映画館がはねて』中公文庫、1989年、p166-8)

私は2018年4月に山田洋次が引揚げ後に住み着いた山口県宇部市を訪れ、地元のファンクラブであるうべYY会が主催した「家族はつらいよ3」の先行上映会に参加し

ました。引揚げ後に住んでいた住宅が残っていて許可をえて見せてもらったのですが、現在は緑のツタが住居全体をおおい崩れる寸前でとどまっている状態で、長い時間の流れを感じました。上映会のあとの懇親会で、山田監督とお話しする機会もあり、日本帝国時代の大連やハルピンでの多民族・多文化的なモダンな暮らしに話題がいったところ、「でもそこは植民地だった」ととても重い言葉が返ってきました。「男はつらいよ」シリーズの寅さんのモデルになった人は、宇部時代に闇市の買い出しで出会った「ハルさん」という方だったようです。

(3) 北海道——戦後空間における「植民地」を認識する回路

映画『家族』が公開された1970年代は、雑誌『潮』の特集や個人史など「引揚げ」経験が注目される時期でもありました。私は山田洋次の北海道へのこだわりを、「引揚げ」経験を植民地経験の思想として転換していく契機に関係してはいないかと考えていました。山田の引揚げをめぐるテキストには、満州を懐かしむ表現はほとんど見られません。これは小林勝なども共通して、育った場所を「故郷」として懐かしんではならぬという強い罪の意識がかかっています。そんな時に、玉井裕志『萌える大草原』にある以下の文章に出会いました。

「T（玉井一引用者）さんの住むところは、日本で最も広いといわれている平野のどまん中で、何か旧満州を思わせるような、地平線の連なりの中に、ポーン、ポーンと赤いサイロが見えかくれしていて、牛が点々と草をはむ情景は旅行者の眼には絵のように美しい土地だが、しかしTさんたち入植者の生活は、その景色とは正反対のきびしさ、そのものである。山田洋次「月曜寸評——北海道からの便り」『朝日新聞』1972年2月7日朝刊（玉井裕志『萌える大草原』1987年、118-9頁）

この新聞記事では玉井さんからの手紙に対する返事の中に北海道の地平線のみをみて「旧満州を思わせる」という感情がほんの少し現れています。満州の都市部を移住しながら育った山田洋次は、外地教育で習った自分の目では見たことのない内地の風景を、「男はつらいよ」のロケハンを通じて訪れていきます。寅さんシリーズは「失われつつある日本の風景が映っている」「日本の下町の家族の団らんを描いている」などと評価されることが多いですが、寅さんを既存の家族の枠組みに押し込もうとする

と必ず問題が起きてしまう。葛飾柴又は、懐かしい故郷ではあるが、決して安住できる場所にはならないところに作品の面白さがあるように思います。ロケハンを通じて全国をまわる山田洋次にとって、北海道が特別な意味を持っているのは自身の満州経験を思い起こさせる風景があったからです。さらには内地から移住者によって形成され、日本帝国圏内外へと人を送り出し、そして戦後に引揚げ者や復員兵の人口吸収地となりながら入植と離散が継続している北海道の歴史は、満州の都市部を移動して幼少期を送った山田にとって見えなかった満州開拓者と自身の距離感を含めて、外地経験を「植民地」と認識するプロセスに関わっています。

(4) 民子三部作と『母と暮せば』

北海道と日本帝国を結ぶうえで重要なもう一つの作品をとりあげます。2015年に戦後70周年を記念して公開された『母と暮せば』（山田洋次監督、2015年）は、宮沢りえ・原田芳雄主演の二人芝居で広島原爆を生存者と父親の幽霊の視点から描いた黒木和雄監督の『父と暮せば』に対応した作品です。『母と暮せば』では、長崎医科大学の学生の幽霊（二宮和也）と生存者で助産婦の母（吉永小百合）を中心に、話が進みます。崩壊した浦上天主堂だと思われる印象深いシーンが挿入され、隠れキリシタンというテーマにも注意が喚起されますが、注目すべきは亡くなった医学生の恋人（黒木華）が教員として生徒を連れて復員局に行く場面です。息もできないほどの満員の列車に乗って二人は諫早の復員局に向います。復員局では出征したまま行方知れずの父親の消息をたずねますが、既にフィリピンで死亡していることが告げられます。祖父に言われた通り復員局の職員に死亡状況を書き写してもらっているあいだ、女の子は歯を食いしばって必死に涙をこらえています。

このシーンは、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）の母体にもなった「声なき声の会」の機関紙に掲載された杉山龍丸「ふたつの悲しみ」（『声なき声のたより』43号、1967年11月20日）をもとにしています。作者の杉山龍丸は、日本三大奇書として名高い『ドクラ・マグラ』の著者・夢野久作の長男で、1965年のベ平連結成時には、アジア主義を掲げた政治結社・玄洋社の国際部長として呼びかけ人に名を連ねています。今年の春に、福岡県大刀洗平和記念館で開催された企画展「民ヲ親ニス 杉山家四代の軌跡」を見る機会がありました。近年、息子である杉山満丸を中心とした「夢野久作と杉山三代研究会」によって、杉山龍丸や夢野久作など杉山家の歴史が解明さ

れつつあります（杉山満丸『「ふたつの悲しみ」秘話』長崎文献社、2016年）が、この物語が広く知られるようになったのは、山田太一編『生きるかなしみ』（筑摩書房、1991年）に所収されたところが大きいでしょう。

山田洋次監督は『母と暮せば』に「二つの悲しみ」の物語を挿入するにあたって、二つの要素を付け加えました。一つは少女に引揚げ者という設定を付け加えた事、もう一つが少女の名前を風見民子としたことです。一つ目の「引揚げ者」という設定は、少女の来歴を示唆しています。満州や朝鮮半島から凄惨な引揚げ経験をして38度線を徒歩でこえたのだろうか、あるいは台湾や南洋からの引揚げ者だろうか。二つ目の風見民子という設定は、既に述べた通り長崎県伊王島から北海道中標津町に向う1970年代の民子三部作へとこの少女がつながることを示唆しています。『母と暮せば』によって、民子三部作を「引揚げ」を起点とする風見民子の物語として、日本帝国にはじまる長い時空間において考えることが可能になりました。この物語の接続には、外地経験と引揚げ経験という日本帝国期の移動と、戦後日本の炭鉱離職者の国内移住と入植後の離散の連続性にかかわる視点があります。

4. 引揚げ者の映像表現と 入植・離農の文学表現

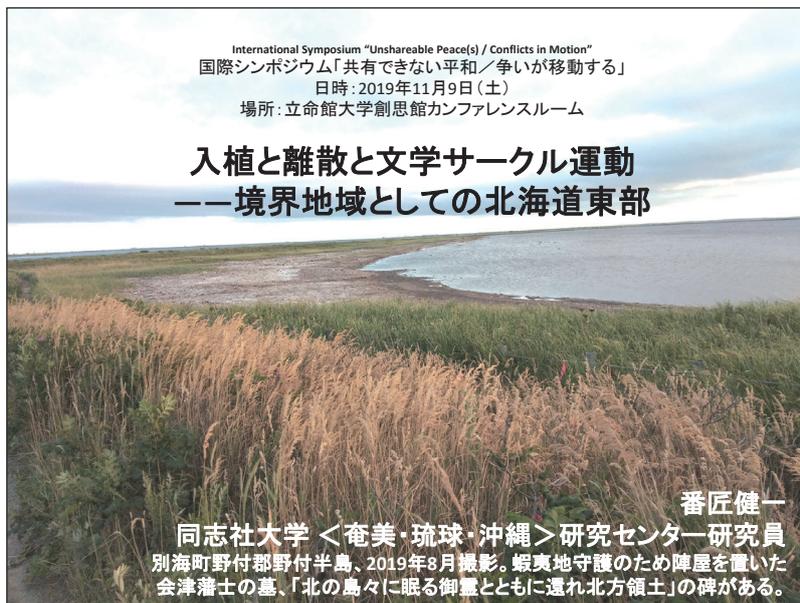
境界領域ともいえる道東で、玉井裕志と山田洋次の出会いがどのような意味を持ったのか、移動と離散を繰り返す人々を描く方法論として整理したいと思います。玉井は根釧パイロットファームに入植後、酪農経営に苦勞しながら自身の労働経験や入植地で起こった出来事を朝霧文学会での活動を通して作品化していきます。さまざまな初期営農計画やブルセラ病の流行によって根釧パイロットファームからは離農者が数多く出ます。1960年の玉井の作品は、離農や夜逃げをせざるをえず安住する場所を失った人々の経験にもとづいています。彼自身も離農勧告を受けながら入植地にとどまり続けた玉井にとって、ブルドーザーによって根こそぎにされた樹々の排根線は、ルーツを根こそぎにされた離農者の姿と重なっていました。Displacementは日本語では転地と訳されることが多いですが、ルーツを断ち切られ根こそぎにされた移動である点が重要です。1969年に山田洋次に会い映画のロケハンやエキストラ出演に関わることで玉井の経験は映画作品へと流れ込みます。『家族』の炭鉱離職者の移動と入植による酪農ユートピアから『遙かなる山の呼び

声』における零細酪農の離散の物語と重ね合わせられることで、玉井文学が描いた離散の物語は北海道の入植地にとどまらない同時代性を獲得しました。酪農の機械化・多頭化・大規模化のなかで1989年に離農したあとも入植時と牛舎を手放さず、憧れてやまない「原野」の夢を保ち続ける姿勢は、記憶のつまった入植時の住居を玉井裕志文学館としてオープンするにいたります。この文学館は道東を訪れる旅行者のひそかな観光スポットとなっています。

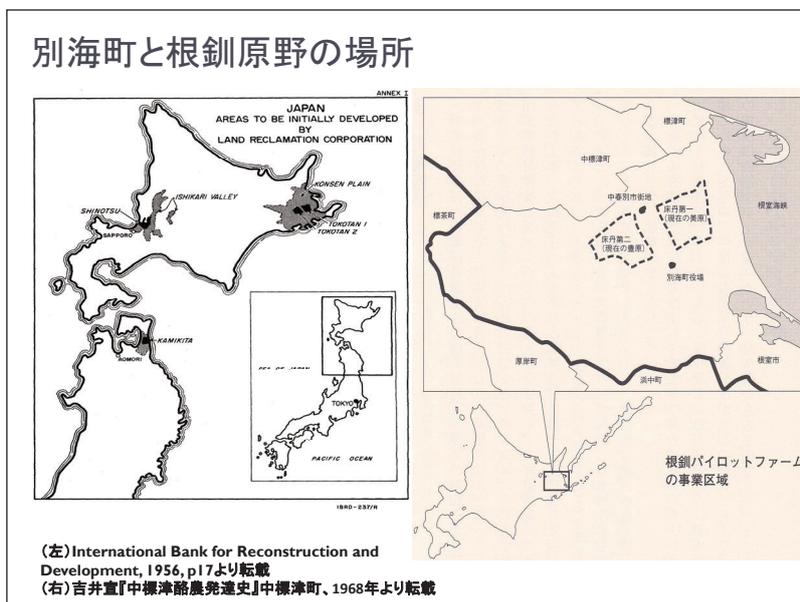
山田は、「男はつらいよ」シリーズのヒットにより、映画のロケハンを通じて戦後日本の地方を移動します。下町の人情や家族の団らんの物語といわれがちな作品ですが、日本全国を歩き歩く寅さんは故郷に安住することができない存在でもあります。とりわけ民子三部作は北海道との出会いをもたらした点で重要でした。引揚げ者として自分が育った満州を故郷として懐かしんではいけないという山田の自己規制は、道東の地平線のある風景を見て「旧満州」を思い出してしまうことと関わっています。酪農地帯を一方的にユートピアとして描くことは、日本帝国のもとで「王道楽土」と呼ばれた満州の虚構と重なります。『家族』にユートピア的な酪農から『遙かなる山の呼び声』における離散する零細酪農家へとという道東の描き方の変化は、ロケハンを通じた道東の人々との出会いが大きいですが、満州と北海道を重ねてしまった自身への自戒でもあったのではないのでしょうか。戦後70周年に公開された『母と暮せば』では、民子三部作の民子を登場させ引揚げ者という設定を加えています。このことは、戦後の炭鉱離職者の北海道への移動に日本帝国期の移動を接続させ、長期的な時間軸のなかで植民地や引揚げの問題、戦後の炭鉱離職者や北海道の酪農開発の問題を考えることを提起しています。

注

- 1) 作品内ではA～Dの4階層の設定であるが、根釧パイロットファームではこれに加えてE階層が設定されていた。芳賀信一『根釧パイロットファームの光と影』北海道新聞社、2010年。野間万里子「根釧パイロット・ファーム事業計画と初期入植者の経験」、足立芳宏編『農学・農業技術の比較社会史的的研究』科研費研究成果報告書、2018年を参照



- ・ 本発表の狙い
- ・ 境界研究 (Border Studies)、境界地域史
 空間の脱／再領域化と境界の再設定をめぐる多面的分析 (岩下2016)
 境界地域に生きる人々の生活史 (中山2019)
- ・ 移動研究
 戦後の移民研究：北米移民⇄北海道開拓
 「移動から場所を考える」「移動の叙述方法」(伊豫谷・平田2014)
 移民送り出し→引揚げ・復員人口吸収→入植、炭鉱労働：転地の継続



1. 境界領域としての根釧原野

1) 根釧原野と移動の交差

根室・釧路地方の500,000haの台地

冬期：積雪少ない、地下凍結(～5月)

夏期：海霧で日照時間が寡少

・北海道自体の内地過剰人口の吸収地から移民の送り出し地域への転換

1930年代 大冷害とコガネムシ虫害、根釧原野放棄論。

道東からは満州・樺太だけではなくブラジル・南洋群島へ移民送出(安田1941)

・近代北海道における開拓／移民／植民／難民の重なり(実態として区分不可能)

戦後欠落する「植民」の視点：境界(border)の再設定と固定化、強化に関わる



別海町中春別、2018年3月、番匠撮影(左右とも)

2) 戦後の根釧原野と実質的「国境」地域

・食糧増産と引揚げ・復員人口吸収地としての北海道

・1945年10月、緊急開拓事業実施要領閣議決定

→5年で100万戸、155万町歩の開墾目標のうち北海道は20万戸、70万町歩

・1950年までに外地引揚者(とりわけ国後島、択捉島など千島列島)が455戸1592人、戦災者50戸520人が入地(『別海町百年史』)

・計根別第一飛行場や西春別の第四飛行場(2100町歩)や別海村西南部に広がる軍馬補充部根室支部(1万9000町歩)の土地解放と戦後開拓事業での入植

・ソ連軍による別海町漁船の拿捕、ソ連燃料船漂着事件、

ソ連軍の攻撃を受けたB29の墜落

・1978年に政府が提唱した「北方領土を目で見る運動」の拠点



別海町役場、2019年8月撮影。

正面玄関の左右には、北方領土四島返還のスローガン



別海町上春別、2015年、フォト蔵より転載。
消火活動のお礼に送られたB29のプロペラ

3) 根釧パイロットファームの光と影

1953年 米農業機械メーカーのインターナショナル・ハーベスター社の道東調査

1954年7月 世界銀行の調査団の来日、米農業・軍用機械メーカーキャタピラー社が受注。

→北海道「根釧パイロットファーム」、「篠津泥炭地開発」、青森県「上北パイロットファーム」の開墾事業に、農地開発機械公社を通じて世界銀行の融資計430万ドルが提供

・根釧パイロットファームの特徴

①大型農業機械による機械開墾、②ジャージー牛が指定牛、③先行投資型開拓
北海道の機械開墾のモデル、途上国への開発援助のモデル(藤倉2012)

→酪農のユートピア？

・問題点

①輸入ジャージー牛の品質問題

ブルセラ病の発生による全頭殺処

②農業計画と土地配分問題

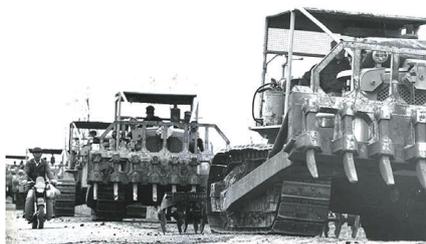
泥炭地と牧草地の無区分、

③入植者の負債

政府の計画失敗への無保証

(芳賀2010)

→不可視化された大量離農者の離散



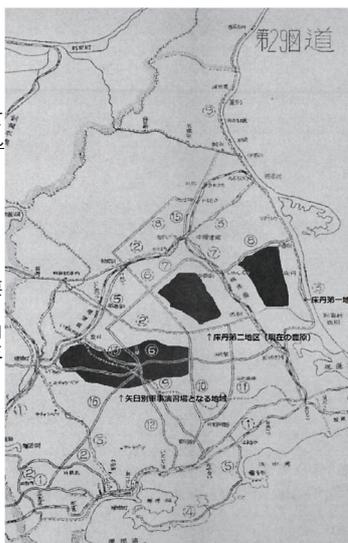
根釧PF事業のレキドニザ、世界銀行ホームページより

4) 別海村の自衛隊誘致と矢臼別軍事演習場

「陳情書 昭和33(1958)年6月21日、西春別地区区内有志および各代表者の強力なる賛同を得て、自衛隊駐屯誘致の懇親会を開催、種々検討し、私たちは戦後開拓者として日夜営農経営に邁進してまいりました。自衛隊が駐屯されて、当開拓地の農産物林産物などを収め、その恩恵により私たちの営農状態をさらに伸長することを確信して全面的に推進運動を展開することを万場一決し、その第一事項として部落民はあくまで矢臼別地域に於て、毎年連続的に使用せられ自衛隊の演習場として最も理想的現場であり、一時的演習場に使用せられることよりも時代に即応する自衛隊の駐屯指定を村議会を通じての地元の強い要望を特に御詮議下さいまして是れが実現を期し、代表者連署を以て陳情する次第であります。」「請願第一号 自衛隊駐屯誘致に関する請願」、「矢臼別演習場」取得三自治体の議会審議録』2005年、4頁

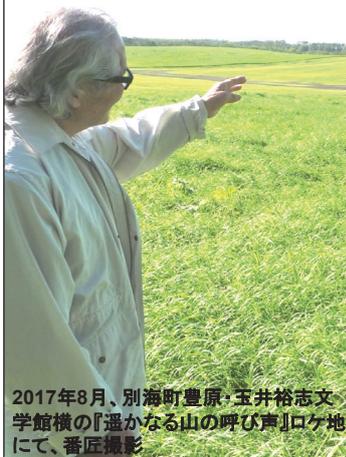
1962年に別海村長が同意承諾、翌年民有地の買い上げ戦後開拓入植地の計84戸が買収。2戸が移転反対。→日本最大規模39万人の北方機動演習(番匠2019)。

現在、SACO合意以降の米海兵隊の実弾訓練の本土移転5か所のうちの1か所として海兵隊が演習。「軍事化」の切り分け:米軍(顕在的暴力)／自衛隊(見えにくい軍事化、民生活動:災害支援、援農、婚活)(JSPS科研費:地域社会の「軍事化」をめぐる歴史社会学)



1957年時点での新設道路及び改良図、『根釧原野開発計画調査資料』より転載、黒塗りは発表者

2. 酪農家・玉井裕志と朝霧文学会



2017年8月、別海町豊原・玉井裕志文学館横の『遥かなる山の呼び声』ロケ地にて、番匠撮影

(1) 玉井裕志と朝霧文学会

1934年生まれ。大正期に両親が四国から釧路に渡った開拓移住者2世。
1944年、ルルラン、弟子屈への疎開、炭焼き小屋での生活。
1958年、根釧パイロットファーム事業に入植(床丹第二地区)
1966年の文芸サークル「朝霧文学会」の結成。
1970年、山田洋次との出会い
1980年、『遥かなる山の呼び声』エキストラ出演
1981年には北海道文学の同人となり、1981～84年にかけて北海道新聞社が主催する『北海道新鋭小説集』に4年連続で掲載される。
1982年、「排根線」「海燕」に掲載
1987年、エッセイ『萌える大草原』が出版。根釧原野での牛飼いの苦悩と山田洋次氏との出会い。
1989年3月に離農し、住居と牛舎を残して牧草地は売却。『月刊新根室』『文芸根室』『中標津文芸』などへ作品発表を継続。
2013年に入植時の住居を「玉井裕志文学館」として公開。

1966年1月3日、別海酪農高校2年の畠沢憲二(当時16歳)、NHKラジオで活躍中の詩人・酪農家の小野京子(当時19歳)、根釧パイロットファーム入植8年目の酪農家・玉井裕志(当時31歳)の三人によって結成。別海村の生活と農業労働に関する、詩・短歌・エッセイ・小説が中心。

玉井裕志「その眼は.....生きていた」『朝霧』創刊号、1966年

・南洋引揚げ者の再入植と離農

玉井裕志「D階層の人々」『朝霧』第3号、1967年:強制離農の不条理

玉井裕志「凍原の月」『朝霧』4号、1968年:夜逃げした両親の廃墟化した家

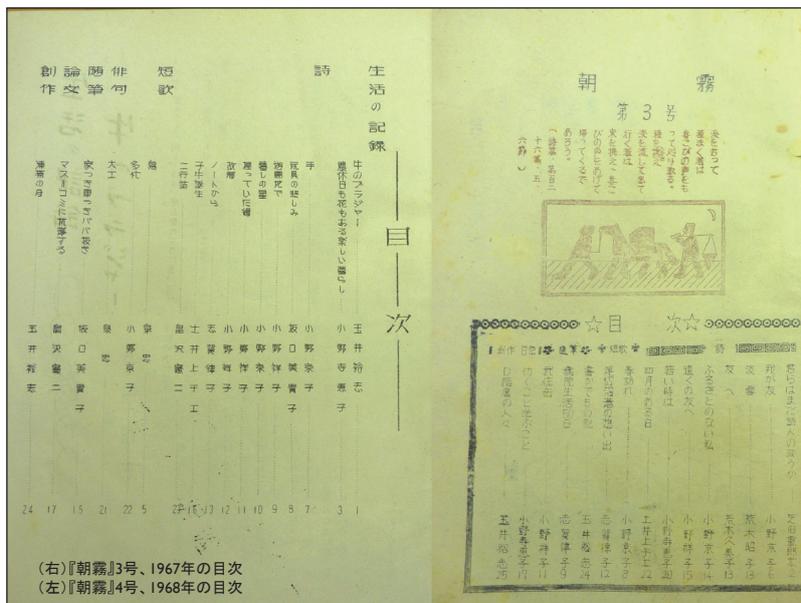
玉井裕志「凍土の怒り」『朝霧』5号、1969年:極寒のビート収穫の労働

玉井裕志「こだまする雪原」『朝霧』6号、1970年:牛乳出荷と農民運動

・芝田重郎太の影響

芝田重郎太(1932-1989):1954年、早稲田大学露文科卒業し大学院進学。シヨロホフ『静かなドン』の翻訳に関係、共産党に入党。1959年酪農短期大学に入学、北海道大学獣医学部に転校し1963年に卒業。別海村農業共済組合の獣医師に就職、のち独立開業。別海村議会議員を務めるかたわら、乳価闘争や矢臼別軍事演習場反対闘争にかかわる。





(右)『朝霧』3号、1967年の目次
(左)『朝霧』4号、1968年の目次

(2)『朝霧』と玉井裕志の作品①

玉井裕志「その眼は.....生きていた」(『朝霧』創刊号、1966年)

西沢(親兄弟のない故郷喪失者)、京子(西沢の妻、南洋引揚げ者)、吉岡(南洋引揚げ者)

「太平洋戦争以前、志を抱いて部落の人々の反対もききいれず、進んで海外移住の申請をし、西太平洋にあるパウル諸島のコロール島に、この地から互いに励まし合って旅立っていた程の間柄であった。そして、その島で終戦をむかえて、体一つで祖国日本へ帰らなければならぬはめとなった。吉岡家と京子一家は、その引き揚げも一緒だった。しかも運転手の吉岡常雄は京子より二つ歳上で京子と同じ生れ故郷をパウル諸島のコロール島にもった幼なじみでもあったのである。」「その眼は.....生きていた」、29頁

(3)『朝霧』と玉井裕志の作品②

玉井裕志「D階層の人々」(『朝霧』第3号、1967年)

登場人物: 信介と洋介の兄弟、そして農協監事の早瀬健一郎という3人の同郷出身者達と、入植者である素川満彦の4人

・農協による階層分け

A層は農協に預金があるもの、B層は収入・支出がゼロ程度のもの、C層は30万円程度の負債があるもの、D層は生産源である乳牛頭数が極めて少なく40万円以上100万円に近い負債があるもの

・夜逃げ未遂／強制離農勧告と「蟬の抜け殻のような廃墟」

(4)酪農家・玉井裕志と映画監督・山田洋次の出会い

(玉井裕志)「その年(1969年初頭—引用者)は雪の多い年だったんですよ。足スボスボ漕ぎながら初めて山田さんが僕の家を訪ねてくれたんですよ。その年、山田洋次さんは『男はつらいよ』の第一回でものすごい大評判だったんですね。山の中で一生懸命牛飼ってるもんだから、その情報もなんも聞いてなかった。だから僕は、わたし山田洋次ですって名乗られたった分らなかった。.....。本当に若い人で映画監督だっというもんから、最初はムカッと来た。我々の苦勞もなんも知らんくせに、華やかな、酪農郷っていうのが豊かで、家族が和気あいあいと生活してるんだって、そういうイメージを映画で撮りに来たんだと。凄く腹が立ったのさ。そんなもんじゃない、と。そして私は、いまの酪農家は行きずってるんですよ、大変なんだって、そんな僕は喧嘩を吹っ掛けた分けじゃないんですけど。そう言うって一応抑えた。そしたら、それが山田さんのハートをうったんだね。まああの毎年苦しくて離農したいと思ってるんだけど、次の春になったら大草原が緑が次々に萌えあがって、それを牛が食べて乳房が膨れ上がって、牛乳がどンドン出だす、と。そういうのになってくると今年もそんな気持ち起こさないで、もう一年頑張ってみようというそういう気になるんだって、それを山田洋次さんに言ったんですよ。それがセリフになったの。『家族』でも倍賞千恵子さんがそれを言うし、『はるかなる山の呼び声』でも高倉健さんに言うんですよ、「私は体小さい大風が来ると体が吹っ飛ばされそうになるんだけど、また春になったら希望が湧いてきて言うんですよ」って、それは私の妻が言ったセリフなのさ、山田さんに。」(「かくさんの座って立ち話」2016年9月17日放送、FMはな(中標津)、下線部引用者)

(5) ルーツ(Roots)を根こそぎにする農業機械——
玉井裕志「排根線」『海燕』1982年

あらすじ: 根釧原野のパイロットファームでもくもくと「排根線」崩しを続ける「猫背の卓造」の手仕事の労働と農業機械との対峙、離農を描く作品。

「根室原野へ入植した年の春から卓造は六、七年もの長い間、そんな怪物のような機械がしでかした排根線のあと始末をコツコツとつづけてきたことになる。鍬や、スコップを使って土を切り崩し、その土の下から掘り出した立木や、ふたかかえもみかかえもありそうな大木の切り株などを鋸や斧や金矢などを使って切りきざんだ。……(中略)。一鍬一鍬、切り崩す排根線の肥沃な土を卓造はじんわりと握ってみる。何十年も土に生きてきた、それは執念のようなものであった。それが、肥沃な土か、やせた土壌かは、見た眼とこうして握ってみることで卓造にはよくわかる。——何て、ブルドーザーというやつは、ひっこ抜いた木の根と一緒に肥えた表土をかきむしって、みんな排根線へよせちまったもんだ——卓造は、むらむらと腹がたってきた。」(「排根線」、p.278-9)

→キャタピラー社: 軍用ブルドーザーや戦車の生産。朝鮮戦争後のアジアへの販路。農業機械と軍用機械の境界線



(6) 離農と「原野」へのこだわり——玉井裕志文学館

・根釧原野での夢と破綻

「根室原野での入植の現実には、まことにきびしく、私の少年時代の農村というオアシスのようなバラ色の夢は、たちどころに、次々と打ち砕かれていった。多忙と、貧しさ、過労とが、束になっておそいかかってくる現実に、私は、立ちむかって生きなければならなかった。でも、私は、ここであっさり少年時代からの夢を放棄してしまったわけではなかった。多忙をきわめる日常生活のわずかな時間を縫うように、わずかずつでも、読書は続けていった。そして、朝、暗いうちに起き出して、文章も書くようになり、とよ子が生まれた翌年の春には、広く呼びかけて、それに応じてくれた仲間たちとともに「朝霧文学会」というサークルを結成し、文芸雑誌『朝霧』を創刊していた。」玉井裕志『萌える大草原』草の根出版社、1987年、pp65-66

・『遥かなる山の呼び声』へエキストラ出演
／映画作品中の倍賞千恵子・高倉健セリフから玉井作品へ再引用

・2013年 玉井裕志文学館オープン
→根こそぎにされても懂れてやまない「原野」



2018年8月、玉井裕志文学館と玉井氏、番匠撮影

3. 山田洋次と北海道——民子三部作と『母と暮らせば』

(1) 山田洋次と民子三部作

『家族』(1970)→『遥かなる山の呼び声』(1980)の酪農家の描き方の変化: 酪農ユートピアから崩壊・離散へ(番匠2014a)。

『家族』: 長崎県伊王島の炭鉱夫が北海道中標津の開拓村へ入植するまで日本列島縦断を描いたロードムービー。酪農をはじめた緑の草原で牛と人間の生命再生産が始まるユートピア的な結末。ピエトロ・ジェルミ『越境者』(1950)(シチリア島の炭鉱閉山にともなってアルプスを山越えする炭鉱労働者たちの移動)に着想を得た作品。

『遥かなる山の呼び声』: 連れ合いに先立たれた零細酪農家の母子が、流れ者との共同生活のなかで農業経営の立て直しを図るも最終的に離農。『シェーン』(1953)に着想をえた作品。主題歌が「遥かなる山の呼び声」。アメリカでの西部劇とリアリズムの映像技法との融合。



(上)映画『家族』、(下)映画『遥かなる山の呼び声』
@松竹、DVD発売元: 松竹ホームビデオ

(2) 引揚げ者としての経験の言語化

「私の妻は山陰生まれである。私自身は満州半分、日本半分という無国籍風な育ち方をしている故郷というものを持たないためか、故郷のある人に対しては幼いころから強い羨望、ないし、あこがれをいだくのが常であった。」『地方訛り』『新潟日報』1972年4月4日、(山田洋次『映画館がはねて』中公文庫、1989年、p101)

「要するに生活に苦勞がなく、植民地独特の封建的な人間関係から解放された生活環境の中で育った私に、貧しいということがどんなにつらいことか、生きるということが、どんなに切実なことか、ということはおおよそ理解できなかったのである。／昭和20年、日本が戦争に敗れると、満州の日本人の生活は一転して悲惨なものとなった。私たち一家も、命からがらリュックザックをひとつずつ背負って米軍払い下げのリバティ船に乗り、内地に引揚げた。……(中略)。みじめな思いをすることがよいことだ、とは思わない。…しかし、私にとっては、日本の敗戦によって引揚げ者となり、山口県の田舎町で生きるために味わった体験が、とても貴重なものだと考えている。」『飛ぶ教室』1982年(山田洋次『映画館がはねて』中公文庫、1989年、p166-8)



(3) 北海道——戦後空間における「植民地」を認識する回路

1970年代：雑誌『朝』の特集や個人史など戦後「引揚げ」経験が注目される一つの時期。

「月曜寸評」で、玉井裕志を紹介、北海道東部の開拓地＝「旧満州を思わせる」

「T(玉井—引用者)さんの住むところは、日本で最も広いといわれている平野のどまん中で、何か旧満州を思わせるような、地平線の連なりの中に、ポツン、ポツンと赤いサイロが見えかくれしていて、牛が点々と草をはむ情景は旅行者の眼には絵のように美しい土地だが、しかしTさんたち入植者の生活は、その景色とは正反対のきびしさ、そのものである。山田洋次「月曜寸評——北海道からの便り」『朝日新聞』1972年2月7日朝刊、p15(玉井1987、pp118-9)、下線引用者



(4) 民子三部作と『母と暮せば』

復員局で風見民子登場

杉山龍丸「ふたつの悲しみ」(『声なき声のたより』四三号、一九六七年十一月二〇日、のち山田太一編『生きるかなしみ』筑摩書房、1991年)

* 夢野久作の長男で、一九六五年のペ平連結成時には、アジア主義を掲げた政治結社・玄洋社の国際部長として呼びかけ人に名を連ねる。

山田洋次の追加設定

①引揚げ者、②風見民子の名前

植民地経験+引揚げ経験と、炭鉱離職者の長崎から北海道への移住(『家族』)・入植・離散(『遥かなる山の呼び声』)の物語接続。

→移動の連続性への視点。長い移動のなかで戦後や植民地経験を再考



4. 引揚げ者の映像表現と入植・離農の文学表現

○玉井裕志と山田洋次の出会い

・玉井裕志

晴耕雨読の生活を夢見て根釧パイロットファームに入植、朝霧文学会の活動

「転地」(Displacement) 経験の作品化

玉井裕志「排根線」: 農業機械によって根こそぎにされた樹木＝ルーツを根こそぎにされた人々(離農者・離散者)

山田洋次の『家族』『遥かなる山の呼び声』への影響

⇒北海道の辺境にとどまらない戦後日本の同時代性を獲得

・山田洋次

玉井批判を受け山田は、辺境にユートピアを求める歪んだ関係に気づき、故郷を知らない者(引揚げ者)が自身のルート(Route)を言語化する行為。

: 『家族』『故郷』『幸福の黄色いハンカチ』『遥かなる山の呼び声』などリアリズム映画の手法と重なる。

移動論というより、移動にかかわる二つの表現方法として二人を再評価



参考文献

- 岩下明祐『入門国境学』中公新書、2016年
 J・クリフォード『ルーツ』月曜社、2002年 (James Clifford, *Routes: Travel and Tradition in the Late Twentieth Century*, Harvard University Press, 1997)
 玉井裕志「草原の囁き」、北海道新聞社編『北海道新鋭小説集(第7集)』1992年
 玉井裕志「排根線」『海潮』1992年10月号、福武書店
 中澤謙一「前える大草原」草の根出版社、1987年
 中澤謙一「中澤謙一さん委員会編『中澤謙一五十年史』中澤謙一、1995年
 中山大將『サハリン脱走日本人と戦後日本—樺太住民の境界地域史』国際書院、2019年
 香匠健一「映画『家族』から見た高度経済成長」『戦後史再考』平凡社、2014年
 香匠健一「『家族』から『遥かなる山の呼び声』へ」『文化／批評』6号、2014年b
 香匠健一「離農のユートピアと地域社会の軍事化—根釧パイロットファームの再編と北海道・矢野別軍事演習場の勝敗」『立命館大学国際平和ミュージアム紀要』20号、2019年
 藤倉良「根釧および北パイロットファーム」『根釧パイロットファーム 世界銀行からの援助による日本の農業開発』別海町、2012年
 藤倉良・中山幹康「世界銀行借款による日本の農業開発プロジェクトの長期的評価—二つのパイロットファーム—」『公共政策志林』(法政大学公共政策研究科)1、2013年、pp35-47
 芳賀健一「根釧パイロットファームの光と影」北海道新聞社、2010年
 安田孝次郎『北海道移民政策史』生活社、1941年
 山田洋次『映画館がはなれて』中公文庫、1989年
 山本真次郎・亀井文夫「対談: 創映画における記録的手法について」『キネマ旬報』1949年3月第53号
 吉井重「中澤謙一農業史」中澤謙一、1968年
 ラジオ「故郷の空」立ち上り2016年9月17日放送、FMはな(中継音)
 「矢野別軍事基地 現存自治体(北海道厚岸郡厚岸町、活中澤謙一五十年史)の歴史」『中澤謙一』2015年